大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

東京帝國大學經濟學會

經濟論叢

第四十二卷　第一號

昭和十一年一月一日發行

新年特別號

恩給年金賞與の課稅……法學博士　神戸正雄
經濟社會學の概念……文學博士　米田庄太郎
費用としての勢力……文學博士　高田保馬
幕末諸藩の開國思想……經濟學博士　本庄榮治郎
經濟學史の基本問題……經濟學博士　石川興二
產業處理問題……經濟學博士　八木芳之助
表式調査に就いて……經濟學博士　蜷川虎三
戰前戰後の獨逸社會事業……經濟學士　中川與之助
原料仕入に於ける基本問題……經濟學士　大塚一朗
利潤論の修正……經濟學士　柴田敬
支那の幣制改革と其の意義……經濟學士　松岡孝兒
日本資本主義成立過程の一考察……經濟學士　堀江保藏
中立貨幣に於ける貨幣數量……經濟學士　中谷實
再保險の發展と保險企業結合……經濟學士　佐波宣平
都市と農村との對立に關するアダム・スミスの見解……經濟學士　白杉庄一郎
商業機能學說の發展……經濟學士　堀新一
臺灣の酒專賣……經濟學博士　汐見三郎
國民主義者の私企業觀……經濟學博士　作田莊一
植民地再分配論の種々相に就て……法學博士　山本美越乃
貿易商品の集中性と分散性……經濟學博士　谷口吉彥
我が國の銀行預金……經濟學博士　小島昌太郎
新着外國經濟雜誌主要論題

（禁轉載）

第四十二卷　六八　第一號　六八

經濟學史の基本問題

石川興二

一、經濟學史的聯關の問題

經濟學史の研究目的は諸經濟學體系の史的發展的聯關を明にすることにある。この史的發展的聯關を明確にするに當り我々は歴史的研究一般に就ての難問題に逢着する。それは史的發展的聯關の根據如何の問題である。これを經濟學史研究について云へば、個々の經濟學體系の史的發展的聯關は如何にして可能なりやと云ふ問題である。この問題は經濟學史研究の最も基本的な問題であるが、未だ十分に考察されて居ないのである。而もこの問題を明確に解決せずしては、經濟學史研究を一つの學的研究として確立することは出來ない。かくて我々は先づこの問題解決の立場を考察しよう。

二、學史的聯關に關する特殊主義、普遍主義、個性主義

ディルタイは「歴史的世界の考察は我々に困難な問題を課する」と述べ「この世界に於ける諸個人の、彼等の自由の、加之彼等の放肆の相互作用、諸國民性及び諸個人性の相違、最後にその中

に此等總てが現らはれるところの自然聯關より來る諸の運命」等より成る聯關を問題とし而して曰く「實用主義的歷史記述者が個々なるものゝ諸力の働きに卽ち自然並に運命或はまたより高き手の諸の作用に耽るにしろ、また形而上學者が此等の作用する諸力に抽象的な諸形式を恰もそれが人類に行く手を指圖するかの如くに考へて置き代へるにしろ、兩者は此問題自體に達しない。歷史並に人類の秘密はその何れよりも一層深いのである」と述べて居るが、[1] こゝにこの問題に對する常識的な特殊主義的立場と形而上學的普遍主義的立場の對立が示めされて居るのである。卽ち前者は個々の力の働きにとらはれて偶然的な聯關を見るに過ぎないものであり、後者は形而上學的形式を假定してこれ等のものに外的な聯關を與へるにすぎない。このことは學史的聯關についても見られ得る。而して學として最も早く成立したところの哲學に於て最もよく見られ得るが故に、先づ哲學について考察する。卽ちヘーゲルは次の如くに述べて居る。

「此形態は理念の諸發展段階に偶然的な zufälliger 順列の形式を云はゞ諸哲學に於ける諸原理及びその實現の單なる相違 Verschiedenheit の形式を與へる。然し數千年に亘るこの仕事の建築家は一つの生き生きした精神である。……哲學史は、歷史上に現れる異なる諸哲學に於て、異なる完成段階に於ける只だ一の哲學を示めすのであり、また各體系の基礎にある特殊諸原理は同一の全體的なものゝ諸分枝に過ぎないことを示めすのである。[2]」

常識的な特殊主義的立場に對してヘーゲルがかく云へる時、彼は哲學の聯關の問題に對して一

1) Dilthey. Ges. Schrif., I. S. 127.
2) Hegel; Encyclopädie § 13

歩を進めたのである。即ち常識的な立場が個々の學的體系そのものに着眼してこの各々のものを特殊的なものと考へ從つてその聯關は全く偶然的なるものとするに對し、彼は今や諸學的體系の根柢に生き生きせる精神又は生命を見たのである。即ちこれ等諸體系はこの一つの生命が順次に生産したところのものとして必然的に聯關づけられて居ることゝなるのである。ヘーゲルがかく哲學體系の下にそれを生産し表現する生命を見たことは一進歩であるが、然しこの生命は、形而上學的な普遍的生命たるに過ぎない。從つて個々の學的體系はその獨立性を失ふてこの普遍的原理に從屬するものとなり、その聯關は外的とならざるを得ないのである。故にそれは未だ眞の解決とは云ひ得ないのである。

ヘーゲルより出發し而もヘーゲルに於ける形而上學的なるものを否定して更に深く進まんとせしディルタイは、哲學の史的發展的聯關の問題についても更に深き思索に進んだのである。

即ち彼は人々が哲學なるものの何なるかを考へる時に賴りとする樣な代表的な諸哲學體系について哲學の本質的特徴を歸納的に求めこれをその根柢としての人間的生の構造聯關の中に於て一つの生き生きせる機能 eine lebendige Funktion として把握した。かくて哲學の諸體系は人間的生に於けるこの一つの機能が諸歴史的事情に即して表現されたものとして聯關的に把握されることゝなつたのである。[1] 即ち彼は次の如くに云ふて居る。「歴史的諸事情のもとに現れるが然し結局哲學の一つの統一的な業績 eine einheitliche Leistung der Philosophie に基礎付けられるところの諸

1) 本誌昭和六年四月號、拙稿「ディルタイ哲學と經濟哲學」參照

作用を我々がこゝでは至るところ問題として居ると云ふことを歴史的研究が示めすのである。哲學の一の統一的な業績は最高の一般化並に最後の基礎付へと絶へず進み行くところの普遍的思慮である。從つて哲學の構造は此の哲學の根本的態度が時間的諸事情に應ぜる個々の作用に對する關係に in der Verhältnis dieses ihres Grundzuges zu den einzelnen Funktionen nach Massgabe der Zeitbedingungen. 置かれて居る。」[1] と述べて居る。これは前述せし特殊主義の立場と普遍主義の立場との對立を眞に止揚せし云はゞ個性主義の立場である。即ち特殊主義は個々の學的體系を單に個別的特殊的なものとなし從つてその聯關は偶然的となり、普遍主義は普遍的原理を外に假定し個々の體系をこれに從屬せしめ從つてその聯關は外的となる、然るに個性的立場に於ては、個々の體系の獨立性を重んじながら、この個々のものに内在的な普遍的原理を明にし、個々の體系はこの内在的な普遍的原理が歴史的諸事情により特殊化されることによつて成立てるものとして個性的に把握されたのである。かくて學史的聯關は今や内面的本質的な聯關となるのである。

この哲學史について明にされたる個性主義的立場は、經濟學史的聯關の問題の解決についても正しき立場を與へるのである。即ち經濟學體系を成立せしむるところの一つの本質的態度が明にされ、この普遍的態度が諸種の歴史的事情によつて特殊化されることによつて諸經濟學體系が成立することが明にされればよいのである。かくて今や經濟學史的聯關は如何にして可能なりやと云ふ問題は、經濟學史的聯關に關してかくの如き内在的普遍的原理並にこれを特殊化する原理は

1) Dilthey Ges. Schrif. VII S. 169

何なりやと云ふ問題に進展したのである。而して先づこの內在的な普遍的原理を明にし、次に特殊化の原理を明にしよう。

三、經濟學史的聯關の普遍的原理

ディルタイは科學史の聯關一般につき次の如くに述べて居る。卽ち彼は歷史の世界に於ける聯關を一般的に考察せし後に曰く「人間性の總體性に基礎付けられて居るところのこの生き生きした聯關の內に於て人類の知的發展 die intellektuelle Entwicklung が科學に於て漸次に分化した。——科學は個人を越へ理性的聯關を形成する。個々人の目的活動——それをシュライエルマッヘルは「知らんとする意欲」と名づけ、他の人は「知らんとする本能」と名づける——は、それに應ずるところの他の人々の目的活動を賴りにし、これを取り入れ、これを蠶食する。而も諸表象、概念、命題は簡單に移され得るものである。それ故に此の聯關又は體系に於て、人間行爲の他の如何なる域に於ても見られぬ樣な一つの絕えざる進展が存する。科學的勞作の此目的聯關は全體意志によつて導かれることなく、個々の個人の自由な活動に於て實現される。」[1]と述べて居る。

こゝに曩に哲學の史的聯關について求められた普遍的原理が科學一般の學史的聯關について求められた。卽ちそれは「知らんとする意欲」である。このことは自然諸科學についてもまた精神諸科學についても廣く妥當する。乍然この一般的なる普遍的原理は精神諸科學について更に具體化

1) Dilthey; Ges. schrif. I. S. 127.

されることを要する。

即ち自然科學の研究の對象である自然界なるものは人間が學的思索をはじめる以前に於て既に完成しまたそれ以來同一不變な世界であるが、精神科學の對象界たる人間的社會的歷史的實在は人間の力によつて絕へず成立し發展し變化して居る世界である。それ故に自然科學の史的聯關については、異なる時代異なる社會に於ける人々の「知らんとする意欲」の自由な目的活動の成果が同一不變の自然的對象を次第に認識的に盡して行くところのものとして直に協力聯關せしめられ簡單に「一つの絕へざる進展」を形成するものとして考へられるが、精神科學についてはかく簡單に考へ得ない。これを事實上に於ける科學の構成部分について見るも、自然科學をなすものは自然的實在の一般的性質に關する理論學又は類型學であるが、精神科學に於ては歷史的社會的實在の一般的構造を明にせんとする理論的部分と、その個性を明にせんとする歷史的部分と、更にこの實在の將來に向つての形成發展 Forgestaltung の爲めの目標並に方策を明にせんとする政策的部分とが見られる、而も最も具體的なものにあつてはこの三部分が相寄つて實踐學を成して居る。これその對象としての歷史的社會的實在が本質上人爲によつて形成發展せしめられるところのものなるが故である。故に精神科學の史的聯關は自然科學に於けるが如き單純なる「知らんとする意欲」によつては考へることは出來ないのである。これまた自然科學に於ては多く問題とならないところの學の史的聯關の問題が精神科學に於ては特に重要なる問題となる所以である。

卽ち精神科學の對象界は人間の實踐によつて成立し發展し沒落し行くところの可變的な對象界であるが故に、これに對する認識主體も單に「知らんとする意欲」ではなく「實踐の爲めに知らんとする意欲」である。こゝに我々はアリストテレスの深き思索に思ひ至るのである。

卽ちアリストテレスは人間を人間たらしむるところの心の部分であるところの合理的な部分について理に從ふ部分と理を把握する部分とを分ち、この理を把握する部分卽ち理性的な部分を更に二種の部分に區別した、一つは不變的な事柄を思考する部分卽ち靜思的部分と云はるべきものであり他は可變的な事柄を思考する部分卽ち思量的部分と云はるゝものである。前者は實踐的でも生產的でもないが、後者は實踐的なる智性である。從つて前者の正しき働きは正しき眞理を求めることであるが後者の正しき働きは正しき意欲に適合せる眞理を求めることである。この實踐的なる智性の最善なる働きが實踐理性である。卽ち「實踐理性は人間善に關して行爲する能力の合理的な眞の狀態でなければならない」かくてそれは人間善を實現せんとする正しき目的を到達する爲めの正しき智識を求めるところのものである。この實踐理性によつて成立する學が實踐學である。而してアリストテレスに於ては經濟學はかゝる實踐學に屬するものとして考へられた。[1)]

かくて精神科學を成立せしむべきところの「知らんとする意欲」は自然科學の根柢に見られたる單なる「知らんとする意欲」ではなく、人間善を實現せんが爲めに人間的實在に對し如何に實踐すべきかを知らんとするところのものであることゝなる。卽ちそれは「實踐の爲めに知らんとする

1)　拙著精神科學的經濟學の基礎問題第一六〇頁參照

意欲」であり、この實踐は「人間善を實現する爲めの實踐」である。

然らば我々は更に進んでこのことを經濟學について明確にし具體化さなければならない。而してディルタイが哲學に關して用ゐたる前述せし方法[1]はこれが爲めに敎へるところが少くないのである。

卽ち我々は茲に先づ經濟學體系を成立せしめる內在的普遍的原理を代表的な經濟學體系について見ることゝする

私は嘗つてスミスの『富國民論』とマルクスの『資本論』につきこれを分析することに出發し「經濟學の根柢をなす公益的精神」なるものを學史的に明にし更にこれを哲學的に規定せんとした。[2]而して次の如くに述べた。卽ち「經濟學史上の各偉人の經濟學的體系は、同一の公益的精神の異なれる歷史的事情に於ける現れである」「各時代各國の經濟學者の取扱ふ問題と方法とは歷史的事情に應じて異るも、只だこの根本精神のみは一貫して變らないのである。否なその根本精神が變らなかつたからこそ異なれる歷史的事實に應じて異なれる體系が自ら生れ出でたのである。」と述べた。私はこのことを茲に更に明確に規定せんとするのである。

卽ち兩經濟學體系は種々なる點に於て異なつて居るのであるが、而もそれを成立せしむるところの根本的態度に於ては普遍的なものが見られる。それは人間的生命の發展完成の爲めに經濟制度に對して實踐すべき學的智識を求める態度である。

1) 本誌本號第七〇頁參照
2) 經濟論叢、昭和二年一月號拙稿「經濟學の根柢をなす公益的精神に就て」參照。

先づスミスの經濟學の根柢を爲すものは新な經濟制度を將來せんとする實踐態度である。而してマルクスの經濟學の根柢を爲すものは既存の經濟制度を變革せんとする實踐態度である。私はこゝに兩經濟學體系の分析を繰り返すことは特にさけるが、而も後年のマルクスが唯物的必然史觀の立場に立ち一應實踐的立場をすてたが如くにも見えることについては一言したい。卽ち青年マルクスは明に「世界を變革する哲學者」の立場に立つて[1]經濟社會の分析を押し進め遂に市民社會の發展沒落に關する自然法則を發見した。彼の「資本論」は卽ちこれである。而も彼はこの必然的法則を知ることによつてこの必然的なる發展過程を速にしまた犧牲少なくなし得ることを意味してゐる。[2]かくて世界を變革せんとする實踐的態度は彼が最後まですてないところのものである。然し實踐態度にはかく將來し又は變革せんとすることの外に更に既存の經濟制度を確保せんとするところのものもある。リカルドウ經濟學やマーシャル經濟學の根柢に見らるべき實踐的態度はこれである。かくて經濟學の根柢をなす實踐的態度には、これを將來せんとするものと、確保せんとするものと、變革せんとするものとの別があるが、而もこれ等經濟學體系の根柢には經濟制度に對する實踐的態度が普遍的に見られるのである。

而もこの實踐的態度は人間的生命の發展完成の爲めに經濟制度に對する實踐的態度である。卽スミスが新なる經濟制度を將來せんとせしこともマルクスが既存の經濟制度を變革せんとせしこともまたマーシャルが既存の經濟制度を保持せんとせしことも人間的生命の發展完成の爲めであ

1) 本誌昭和六年一月號拙稿「經濟學の認識主觀としての實踐哲學者」參照
2) 『資本論』第一卷第一版への序文參照

つたのである。

こゝに我々は經濟學史の世界と經濟史の世界とに於ける著しき相違を見ることが出來るのである。先づ實踐的態度には主我的又は利己的なものと沒我的なものとの別がある。對象たる歷史的社會的實在に對して自己の利益を主として實踐的態度を以て臨むのが前者であり、これに反して自己を對象に沒しその對象たる人間的生命の發展完成の爲めに實踐的態度を以てこれに臨むのが後者である。而して經濟史の世界に於ては、ことに市民社會史に於てはそこにあらはれる英雄は屢々利己的な實踐的態度に於て秀れたものであるが、經濟學史の世界に於ては、そこに現れる英雄は總て沒我的な實踐的態度に於て秀れた人々である。卽ち經濟學史上にその業績を殘すに足るだけの秀れた經濟學者は、自己の利益の爲めにその對象に對して主我的な態度を以て臨むものではない。卽ち自己の利益の爲めにその對象を如何に見るべきかと云ふ態度を以てするものではない。これと反對に對象たる生命の發展完成の爲めにこれを如何にすべきかと云ふ態度に於てこれに對するものである。ディルタイが「精神科學の中に働く把握力は全人である。精神諸科學に於ける偉大なる業績は單なる知性の力强さより來るものでなく人格的生命の力强さより來るものである」[1]と述べしことも、また新正統學派の始祖であるマーシャルが經濟學上の偉人は總べて人道主義者であつたと述べしことも、こゝに深き意義を有するのである。

かく諸經濟學體系の根柢に於て見られたところの、人間的生命の發展完成の爲めに經濟的制度

1) Dilthey; Ges. Schrif. I. S. 38

に對して實踐すべき學的智識を求むる態度は、前述せしディルタイの方法に於けるが如くこれを更に人間的歴史的社會的實在の構造の中に基礎づけることによつてこれを一層明確にしまた全般化することが出來る。

先づ人間的生の構造の中に見んに、人間なるものは、嘗て述べしが如く、對象たる實在を智性に於て認識し、これを感情に於て價値批判し、この價値批判に基いて意志に於て目的を立て更にこの目的を實現する方策を定め、然る後これを實在に對して實現せんとするところの實踐的本質を有するのである。この人間の實踐的本質が、經濟的制度を對象とし、且つその實踐的自覺を學的智識にまで高めんとする時、これが經濟學の根柢に見られるところの實踐學的態度である。

このことは更に進んでこの人間の構造を社會的歴史的實在の構造の中に基礎づけるとき、一層之を明確にすることが出來る。而してこゝに私が歴史的社會的實在の本質的構造となすところの生命と制度の辯證法的構造なるものを先づ一應明にしなければならない。卽ち人間の生命なるものは何等かの制度の下に於てのみ存在し發展し得るのである。而もその制度の下に於て發展し行く生命なるものはいつかは、その下に於てもはや發展をつゞけ得ざるに至る。かくてこの制度を變革し新なる制度の下に於てその發展を續づけなければならないのである。かゝる辯證法的構造を有する歴史的社會的實在の中にあつて、前述せし如き實踐的本質を有する人間が、生命の發展完成の爲めに經濟的制度に對して自覺的な實踐的態度を取つたところのものが、卽ち經濟學體系

の根柢を爲すところの、人間的生命の發展完成の爲めに經濟的制度に對して實踐すべき學的智識を求める態度である。

以上の如き意味に於て、人間的生命の發展完成の爲めに經濟制度に對して實踐すべき學的智識を求める態度が、經濟學の根柢をなすところの普遍的原理として考へられるのである。この普遍的なる態度を基礎として經濟學の史的發展的聯關を明にせんが爲めには、先づ經濟學史上に見られるところの諸の經濟學體系を、この普遍的な實踐的態度が諸歷史的事情によつて特殊化されたところの個性的態度によつて成立つたものとして把握しなければならない。而してこのことによつてまたこの普遍的原理の正しさも最後の論證を得ることゝなるのである。これが爲めには進んでこの普遍的な原理を特殊化する諸事情を先づ原理的に明にしなければならない。

而してこの特殊化の原理として第一に、この普遍的な實踐的態度がそれに對するところの經濟的制度の相違について考へなければならない。これが爲めには先づ生命と制度との辯證法的構造を更に詳にしなければならないのである。

四、經濟學史的聯關の普遍的原理を特殊化する經濟制度の相違

經濟學の研究對象は、云ふまでもなく、歷史的社會的實在である。この歷史的社會的實在の本質構造は、前述せし如く生命と制度との辯證法的發展である。この生命と制度との辯證法的發展

を解り易く先づ學校教育に於ける生命の成長について云ふならば、先づ小學校に於てはじめ小學校制度の下に於てある人間の生命は、この制度の下に於て成長し行き幾年かの後には最早やこの制度の下に於ては發展を繼續し得ざるに至る。この時その生命は進んで中學校の制度の下に進み入らなければならないのである。この生命は中學校の制度の下に於て新なる成長發展を爲して行くのであるが而もやがてまたこの制度の下に於ては發展を續け得ざるに至る。かくて高等學校に進むことが必要となるのである。今やこの生命は高等學校の制度の下に於て新なる發展をなすのであるが、やがてこの制度の下に於ては發展を續け得ざるに至る。かくて更に大學に進むことが必要となるのである。この生命と制度との關係は、廣く人間的生命の發展についても云ふことが出來る。而もこの際その下に生命があつて成長し行くところの制度なるものは、その生命に對して外から與へられるところのものではなく、その生命自體が生產し表現したところのものである。卽ちはじめ古代の氏族的制度の下に於て成長し行ける國民的生命がもはやこの制度の下に於て發展を繼續し得ざるに至るならば、この制度を打破し新に封建的制度なるものを打立てこの制度の下に於て新な發展をつゞけたのである。而してこの封建的制度のもとに於てもはやその發展をつゞけ得ざるに至るならば、この制度を打破し新に市民社會的制度を打立てこの下に於て新なる發展をつゞけたのである。而して今や國民的生命は現代の市民社會制度の下に於て十分なる發展を爲し得ざるに至り、更に新なる制度を打ち立てゝこの下に於てその發展を計からなければならな

い必要に迫られて居るのである。

人間的生命の發展完成の爲めに經濟制度に對する實踐的態度一般は、その對象とする經濟的制度の發展段階の相違によつて特殊化されて、諸種の經濟學體系を成立せしむることゝなる。今これを典型的に見るならば、先づ同一の實踐的態度が、對象とするところの經濟制度が、古代的なものなるか、中世的なものなるか、近世的なものなるかと云ふことによつて、そこに成立する經濟學體系は異なることゝなる。

而も社會的歷史的實在の中に於て經濟的文化域が相對的獨立の域に高められるのは、市民社會制度の下に於てである。故に經濟科學なるものは、近世の市民社會的經濟制度を對象として成立するのである。それ以前にあつては、より廣き歷史的社會的實在を對象とする實踐學的思想體系の中に於て經濟思想を見る。而してこのことは既にギリシャに於て見られるところである。かくて廣き意味の經濟學史は經濟科學成立以前の經濟思想史と經濟科學史とに分たれることゝなるのである。

かくの如く各の制度は本質上人間的生命と辯證法的關係にあるものなるが故に、この各の制度については本質上成立期と全盛期と沒落期とが區別されるが、即ち成立期とは生來い制度が國民的生命發展の束縛となり來りこの生命の發展の爲めには舊制度が打破され新な制度の成立することが必要なる時期である。全盛期とはこの新に成立せし制度が生命の發展と調和しその發展を助け

て居る時期である。沒落期とはこの制度が生命の發展と矛盾しその發展の束縛となり來れる時期である。かくて制度の成立期、全盛期、沒落期はこれを生命が制度に對する關係より云へば、必要期、調和期、矛盾期であると云ふことが出來る。

今これを現代の市民社會制度について云ふならば、此制度の成立期は中世封建的制度が人間的生命の發展の障害となり從つてこの制度が沒落し新なる市民社會制度の成立が必要となれる時期である。かくてそれは產業革命の直前に及ぶ。市民社會制度の全盛期とは產業革命を通じてこの制度が顯著なる發展を遂げ而して國民的生命の發展に對してこの制度が積極的意義を有する時期である。市民社會制度の沒落期とは、この制度が國民的生命の發展の障害となり來れる現代の時期である。

嘗ても述べたるが如くかくの如き生命と制度との辯證法的發展構造なるものは、ヘーゲルの唯心史觀及びマルクスの唯物史觀に於けるが如き必然的な發展を意味するものではなく、むしろ實踐的な發展を意味するのである。卽ちそれは人間的生命が發展完成し行くが爲めには人間的生命がそれを通じて發展し行かなければならないところの本質的な構造であつて、人間の自覺的な實踐を待つてはじめて十分に實現され行くところのものである。故に經濟學の根柢をなす人間的生命の發展完成の爲めに經濟制度に對する自覺的な實踐的態度一般は、その對象とする經濟制度の本質的相違に從つて特殊化され具體的な實踐的態度となつて現れる。卽ちこの實踐的態度一般は

1) 本誌、第三十七卷第四號拙稿「市民主義、國家主義、國民主義」第五五頁以下參照

その對象とする經濟制度を成立期にあると考へるならばそれは生命の發展に必要なるものなるが故にこの制度を將來せんとする態度として現れる。而してこの制度が全盛期にあると考へるならばそれは生命の發展に調和してこれを助けるものなるが故にこの制度を確保せんとする態度として現れる。またこの制度が沒落期にあると考へるならば、それは生命の發展の障害となつて居るものであるが故にこれを變革せんとする態度として現れるのである。かくて經濟制度の成立期に於てはその制度を將來せんとする體系が支配的となり、その制度の全盛期に於てはその制度を確保せんとする體系が支配的となり、その制度の沒落期に於てはその制度を變革せとんする體系が支配的となると一般的に云ひ得るのである。

今これを市民社會について云へば、市民社會の成立期には市民社會の將來體系が支配的となるこれを西歐の例に見れば重商主義、重農主義、アダム・スミス等の經濟學體系はこれに屬するものである。また市民社會の全盛期には市民社會の確保體系が支配的となる、これを西歐の例に見ればリカルドウにはじまる前期正統學派、マーシャルにはじまる後期正統學派はこれに屬する、また歴史派についても同樣に考へ得られる。而して市民社會の沒落期に於ては市民社會の變革體系が支配的となる。これを西歐の例について見れば現代の社會主義學派、これに對立する現代のナチス其他の國家主義學派はこれに屬するものである。マルクスはヘーゲルについで既に早く現代市民社會の矛盾性を明に洞察しその經濟學體系を市民社會の變革體系として打立てたのである

が而もマルクスを祖述する社會主義學派が支配的となれるは今日の市民社會の沒落期に進み入つてからであつた。これと反對に俗流經濟學にありては制度の本質を知り得ずして、又知れる場合にも自己の利益の爲めに、新制度の成立期に於て舊制度を固執せんとしまた現制度の變革期に於てこれを確保せんとする場合が少なくないのであるが、而もかゝる經濟學體系は經濟學の進步發展に貢獻せざるものなるが故に經濟學史研究上重要視することを要しないのである。

かくて一つの經濟制度の成立、全盛、沒落の三つの時期に於て三種の經濟學體系が成立するのであるが、而もこれ等三時期の各の前期と後期とに於ても亦實踐的態度が特殊化されることゝなる。卽ち成立期に於て經濟制度を將來せんとする態度は、その前期に於てはまだ新制度の必要が十分に自覺されて居らないが故に、その將來體系は無自覺的なものとなるのであるが後期になる程自覺的なるものとなる。例へば西歐に於て十六七世紀に榮へし重商主義は强力なる獨立國家の確立を目的とし、この爲めの手段として商工業を奬勵せしことが自ら市民社會の將來に貢獻することゝなつたところの市民社會の無自覺的將來體系であるが、スミスに至つてそれは十分に自覺的な將來體系となる。

次に全盛期に於ける確保せんとする態度は、その前期に於ては新に成立せし制度を解釋確定する態度となつて現れるが、後期に至ればこの制度は次の沒落期に近き生命の發展に對する矛盾が現れはじめるが故にこの制度を保持する態度となつて現れる。これを西歐の例に見れば大體に於

てリカルドウ以下の前期正統學派はこの意味に於ける確定體系であるに對し、マーシャル以下の後期正統學派は保持體系である。卽ちリカルドウは產業革命の混沌たる進行中にあつて今や實現されつゝある市民社會なるものゝ根本原理の把握につとめたのであるが、マーシャルに至れば市民社會の矛盾を自覺しながら而も彼は前期正統學派に於けるが如く個人主義的なる自由競爭を以て直に公益に一致するものとせず、むしろ經濟的自由を以て市民社會制度の特色となしこの經濟的自由が必要に應じて前期に於ては自由競爭となつて現れたが後期となつては自由協同となつて現れるが故に市民社會制度の原理自體は不可なるものではないと主張したのである。これを獨逸の例について見れば前期歷史派はむしろ確定體系であり後期歷史派に到つて保持體系を見ることが出來ると云ひ得るであろう。

最後に沒落期に於ける經濟制度を變革せんとする態度はその前期に於ては破壞的態度が主となつて現れ後期に於ては建設的態度が主となつて現れる。これ變革は破壞より建設に進まなければならないからである。例へば沒落期に於て先づ支配的地位に上り來つたマルクス學派に於てはその後に現れ來れる變革體系に於けるよりも破壞的態度が遙に强いのである。

かくて以上に於て、經濟學の根抵にある人間的生命の發展完成の爲めに經濟制度に對して實踐すべき學的智識を求むる普遍的態度が、經濟制度の發展的構造に卽して特殊化されて成立せしむべき諸の經濟學體系を典型的に見たのである。この際經濟學史上の事實としての諸體系は、只だ

その例として擧げられたにすぎないのである。

かく典型的に見られたる諸經濟學體系の間には、また層々發展の關係が存する。卽ち經濟制度自體について成立期を前提としてその上に全盛期が、また全盛期を前提としてその上に沒落期が展開し行くと同樣に、この各の時期を對象とするところの諸經濟學體系についても將來體系を前提としその上に確保體系が、また確保體系を前提としてその上に變革體系が打ち立てられるのである。且つその各々について無自覺的な將來體系を前提としてその上に自覺的な變革體系が、確定的な確保體系を前提としその上に保持的な確保體系が、破壞的な變革體系を前提として建設的な變革體系が打ち立てられることゝなるのである。

我々は更に進んで、この經濟的制度の相違の外に、この一般的な實踐的態度を特殊化す原理として人間的生命の本質觀卽ち人生觀の相違を考察しなければならない。これ等二種の特殊化の原理を明にせし後、これを總括することによつて經濟學史の發展的構造が明にされることゝなる。然る後この發展的構造を規準とすることによつてはじめて經濟學史上に於ける諸經濟學體系の史的發展的聯關が具體的に把握し得られることを明かにしよう。

（未了）